

ライティング後然草

エグゼクティブ・アドバイザー 林 健一

第8回 同じ調査の結果を報道したのに、記事の内容が異なる!?

2020年12月25日付けの朝日新聞朝刊のコラム「池上彰の新聞ななめ読み」に興味深い分析結果が記載されていた。これは朝日・日経・毎日・読売の各新聞に掲載された記事を比較したもので、同じ調査の結果を報道したにもかかわらず、受ける印象が異なるというものである。具体的には、理数系科目に関する国際的な調査を報じた記事の見出しが、朝日と日経ではそれぞれ「小4『理科楽しい』でも平均点は低下」「小中の理科 順位下げる 学習意欲の低下なお課題」であったのに対して、毎日と読売ではそれぞれ「中2数学 過去最高点」「小中理数 世界5位以内」となっており、本文もこの見出しに即していたとのことであった。

これらの記事が伝えたのは、国際教育到達度評価学会が実施した国際数学・理科教育動向調査（TIMSS）の結果である。これは初等から中等の教育段階にある子供たちの数学（算数）と理科の教育到達度を4年間隔で調査しているもので、日本では小学4年生と中学2年生が調査の対象となる。最新の調査は2019年に実施され、各教科の得点の平均値と各教科の勉強が楽しいと回答した子供の割合が2020年12月に発表されている。詳細は、文部科学省のウェブサイトの「教育」に「国際学力調査（PISA, TIMSS）」という見出しで掲載されているので、ご参照いただきたい（URLはhttps://www.mext.go.jp/a_menu/01_c.htm）。

では、なぜ各紙の見出しが異なったのであろうか。それは、調査結果のどの部分を重視したのかが異なるためである。まず、朝日と日経の見出しは勉強が楽しいと回答した子供の割合に言及したのに対して、毎日と読売の見出しではこれらに触れていない。次に、2学年の2教科で平均点が算出されたにもかかわらず、朝日は小4の理科、毎日は中2の数学の平均点のみを見出しに反映した。日経の見出しは平均点には触れていない。逆に、読売の見出しは4教科の平均点すべてに言及している。

次に、本文を見てみる。2019年の調査では小4の理科の平均点が562点となり、前回調査（2015年）の569点よりも低かった。ただし、4教科の平均点はすべて世界で5位以内を占めた。こうしたデータのうち、朝日は小4の理科の平均点が低下したことを問題視した。一方、毎日と読売は2019年の平均点の高さを好意的に評価している。また、理科が楽しいと回答した小4の割合は92%で、国内では過去最高の値であった。この点を朝日は好意的に評価している。ただし、小4の理科を除く3教科が楽しいと回答した子供の割合は国際平均よりも低く、日経はこの点を問題視している。

この結果、池上氏によれば、「朝日を読むと少し不安な気分になり、日経だと深刻な気分になるが、毎日や読売は自信をつける」記事となったのである。

このコラムは、論証の過程（データから主張を導出する過程）の重要性を示すよい事例である。すなわち、着目するデータによって主張が異なるだけでなく、たとえ同じデータ（小 4 の理科の平均点）に着目したとしても、主張が異なることがあるのである。なお、本稿では主張という言葉を用いるが、ここでの主張は「データから言いたいこと」という意味であり、結論という言葉に置き換えていただいても差し支えない。

ここで、着目するデータが異なれば主張も異なることに異論はないであろう。しかし、同じデータから異なる主張が導かれるのはなぜなのであるか。それは、人によってデータの解釈が異なるためである。具体例を示すほうがわかりやすいので、ある家の冷蔵庫に 1 リットル入りの牛乳パックが未開封の状態に 2 本入っているとしよう。この場合には、「冷蔵庫に未開封の牛乳が 2 本ある」というのがデータとなる。そして、このデータからは「だから、しばらく牛乳を買う必要はない」という主張と、「だから、すぐに牛乳を買う必要がある」という主張のどちらを導くことも可能である。なぜなら、2 本の牛乳が持つ意味は人によって異なるからである。

たとえば、1 人暮らしで、牛乳をそれほど飲まない人にとっては、牛乳が 2 本もあれば十分であろう。このような人は、このデータを「冷蔵庫には牛乳がまだ 2 本も入っている」と解釈するに違いない。一方、育ち盛りで、牛乳好きの子供がいる家庭では、2 本の牛乳などあっという間になくなってしまおうであろう。こうした子供を持つ親は、同じデータを「冷蔵庫には牛乳がたった 2 本しか入っていない」と解釈することになる。この結果、主張が異なるのである。

以上から、何らかの結果に基づいて主張をする際には、多様なデータのどこに着目し、そのデータをどのように解釈したのかを丁寧に説明することが必要になる。そうしないと、相手（主張を受け入れる側）が論証の過程を理解できないからである。論証の過程を理解できなければ、主張も受け入れないかもしれない。主張する側からすれば、こうした事態は何としても避けたいところであろう。

これは医薬品の承認申請資料を作成する際にもあてはまることで、特に臨床概括評価の「2.5.6 ベネフィットとリスクに関する結論」では、論証の過程を説明することが重要になる。ここは申請する品目のベネフィット・リスクに関する結論を記載するセクションで、申請者は「効能・効果で規定する患者集団に対して、この品目はベネフィットをもたらす、リスクは許容できるレベルにある」という主張をすることになる。この主張が規制当局に受け入れられれば、申請品目はめでたく承認されることとなるが、そうでなければ、承認には至らない。

このため、臨床概括評価の 2.5.6 項では、有効性データのどの部分をどのように解

釈してベネフィットをもたらすと考えたのか、そして安全性データのどの部分をどのように解釈してリスクが許容可能と考えたのかを説明することが望ましい。これは「ベネフィットとリスクを評価した過程を透明化しよう」という国際的な流れに沿ったもので、この流れに基づいて日米欧 3 極のガイドラインも改正されている（国内では 2017 年 2 月に「新医薬品の製造販売の承認申請に際し承認申請書に添付すべき資料の作成要領」が改正された）。

この改正を受けて、ごく少数ではあるものの、最近ではベネフィットとリスクを評価した過程を説明した申請資料を目にするようになってきている。たとえば、多数の有効性評価項目の中から重要なベネフィットを選択した根拠を記載した炎症性疾患治療薬の申請資料や、延命効果を評価せず、腫瘍縮小効果のデータのみで申請可能と判断した根拠を説明した抗悪性腫瘍薬の申請資料がこれに該当する。こうした申請資料は今後も徐々に増えていくであろう。

もちろん、従来 of 書き方、すなわちデータを列挙した後いきなり主張を記載する 2.5.6 項を目にすることは今でも多い。その典型例は、多数の有効性（または安全性）データを網羅的に列挙した後、「以上から、△△病患者に対する申請品目〇〇の有効性（または安全性）が確認された」といった一文で締めくくるものである。しかし、ベネフィット・リスクの考察に関する照会事項が出るようになってきていることも事実である。そうであれば、従来 of 書き方を見直し、データをどう解釈したのかを説明してみてもよいかもしれない。そう、時代は変わっているのである。

The Times They Are a-Changin' (Bob Dylan)

(1964 年発表。同名アルバムに収録)

追記

「池上彰の新聞ななめ読み」の連載が 2021 年 3 月 26 日をもって終了しました。毎月楽しみにしていたコラムだったので、個人的にはとても残念です。